

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#55 イタリアン・ネオレアリズモ

ネオレアリズモ

僕の幼少期に自宅から直ぐ近くに洋画の封切館があった。小学5年生頃まではチャンバラ主体の日本映画3本立ての映画館によく行っていたが、小6頃からはその洋画館へ足繁く通う様になった。印象としては多くがアメリカ映画のディズニーものや西部劇だったが、イタリアやフランス映画もまだちょくちょく上映されていた。封切だけではなく月一で1940～60年代のイタリアやフランスのモノクローム名画の特集を上映していたので何時も楽しみにしていた。

その特集の中にイタリアのロベルト・ロッセリーニ監督作品『無防備都市』と、ヴィットリオ・デ・シーカ監督作品『自転車泥棒』があった。

第二次世界大戦直後の混乱したローマが舞台だ。子供にとってはかなり衝撃的な映画だったが、何故か長年心の中にその映像が消えなかった。この二本が、後に見たルキノ・ヴィスコンティ監督作品『郵便配達は二度ベルを鳴らす』と共に“ネオレアリズモの三大作品”と言われている。当然そんな事は当時の僕は知る筈も無く随分と後になってから知ったのだが。

監督らはファシズムやナチズムの渦中で育った世代で、それに対するパルチザン精神なのかも知れない。当時のその様な政治的、文化的な風潮を否定すると共に、イタリア社会が抱える現実的な問題を取り上げた映画が、後年になって「ネオレアリズモ(新現実主義)」と呼ばれる事となった。しかしそのネオレアリズモは戦後そう長く続くことはなく意

外と早く収束してしまったが、その後の世界の映画界に大きな影響を与えた事での存在意義は大きい。

ロベルト・ロッセリーニと ヴィットリオ・デ・シーカ

裕福な家庭に生まれローマで育ったロッセリーニ(1906～1977)は第二次世界大戦前後にイタリア映画ネオレアリズモの先駆的な監督の一人とされている。ローマを舞台にした『無防備都市』はいわゆるカルトムービーといわれるジャンルの映画で、当時イタリアでは全く評価されなかったが、アメリカやフランスで評判を呼びイタリアで再評価されカンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞している。

この映画を見たアメリカ滞在中の大女優イ

ネオレアリズモが登場した頃のローマと現在のローマは全く同じ建物が連なる風景だ。スペイン階段に近いCAFFE GRECOは1760年創業だし、ローマの典型的な総菜店も何百年と変わらない。ローマを中心に発展して来た映画産業もローマの歴史と共に歩んでいる。



一時期、映画揺籃の地だったトリノには国立の映画博物館がある。興味ある数々の貴重な展示がなされている。戦前からのポスターも多く收藏されていて、かなりの数のポスターが吹き抜けの空間に展示されていた。残念ながらお目当てのネオリアリスモ3大映画のポスターは見つける事は出来なかったが。写真右は戦前のフィルム編集機。



ングリッド・バーグマンがロッセリーニに手紙を書き、その縁で結婚した逸話は有名である。また、フランス人 フランソワ・トリュフォーが助手を務めたりと、後のフランス映画にも多大な影響を与える事となった。1977年のカンヌ映画祭で審査委員長を務めた直後に亡くなったが、当時の映画界の重鎮であった。

デ・シーカ(1901～1974)もロッセリーニと同年代に活躍した。戦後直ぐに発表した『自転車泥棒』の直後に発表した『ミラノの奇跡』でやはりカンヌ映画祭でパルム・ドール賞を獲得した。しかしネオレアリズモに早くも行き詰まり、アメリカの俳優ジェニファー・ジョーンズとモンゴメリー・クリフトを起用した『終着駅』や、デ・シーカ自身も出演し、ジェニファー・ジョーンズとロック・ハドソンが主演したヘミングウェイ作『武器よさらば』は分かりやすく好きだった映画である。

数年前に久しぶりに『武器よさらば』を見直しする機会があった。2人が逃避行する前夜に宿泊するホテルがマジジョーレ湖畔の「イル・ポッローメオ」だ。ホテルバーにはヘミングウェイの写真が飾られているとの事で、宿泊してヘミングウェイ・バーで映画のシーンを想いつつスカッチで喉を潤した。

デ・シーカはルイジ・コメンチーニ監督作品

『パンと恋と夢』で俳優としても出演している。主演の女優が幼少から今でも最も好きな女優ジーナ・ロロブリジダだから、当時見逃す筈はなかった。これらは封切ではなく、全て自宅近くのイタリア映画特集で見た映画である。そして大学生卒業直後に封切られた『ひまわり』はソフィア・ローレン、マストロ・マストロヤンニ主演、ヘンリー・マンシーニ作曲の名画は今みても涙を誘う。

ルキノ・ヴィスコンティ

ヴィスコンティは北イタリア有数の貴族 モドロネ公爵の子として1906年ミラノで生誕する。ミラノを統治したヴィスコンティ家の傍流である。終戦直前に発表した『郵便配達は二度ベルを鳴らす』は日本での公開は随分と後だった記憶がある。僕は、イタリアの監督の中でも最も好きな一人であるヴィスコンティ作品の中でも、ネオレアリズモ作品後となる70年代前後の貴族をテーマとした耽美的な作品が好きだった。中でもシチリア貴族の没落をテーマにした『山猫』は出演俳優のキャスティングとニーノ・ロータの音楽が醸し出す壮大なドラマで、カンヌ映画祭でパルム・ドールを受賞している。

この作品でアラン・ドロンが演じた若き貴族タンクレディ(Tancredi)。シチリア最高峰のワ

イナリーの一つ「ドナフガータ(Donnafugata)」に、その名を取ったワインがある。土着品種ネーロ・ダーヴォラと国際品種カベルネ・ソーヴィニヨンとのブレンドだ。シチリアの太陽をいっぱい浴びたワインは豊潤で長期熟成にも耐える。最近ドルチェ&ガッパーナとのコラボしたカラフルなボトルが斬新だ。

ドイツ三部作の一作『ベニスに死す』の舞台となったヴェネツィアリド島の「ホテル・デ・パン」にはかつて宿泊して、プールサイドでマーラーの交響曲 アダージェットを聴きながら映画を思い出して浸った事もあった。

その後のネオレアリズモの影響を受けている好きな監督達、ダミアノ・ダミアーニ、フェデリコ・フェリーニ、ミケランジェロ・アントニオーニ等、イタリア映画の監督と作曲家は僕の人生と共に重要な一部を確実に占めている。ネオレアリズモのムーブメントはその後フランス映画におけるヌーベル・バーグへと引き継がれ、その後のニューアメリカンシネマへと続いて行くと言う世界の映画史にとっての重要な発火点となった。 **P.B.**

Profile

伊藤英一

事業家。ポート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。